

あそ

10

2011



稱名寺



恩田秋夫の
一茶俳句切手

そば所と人はいふ也赤蜻蛉
更しなの蕎麦の主や小夜砧
赤椀に龍も出そうなそば湯かな

老いの身は今から寒きも苦になりて

山鼻やそばの白さもぞつとする

おのが味噌のみそ臭さをしらす

蕎麦国のたんを切りつつ月見哉
夕山やそば切色のはつ時雨
国がらや田にも咲かせるそばの花
江戸店や初そばがきに袴客
かげろうやそば屋が前の箸の山
そば屋には箸の山あり雲の峰
蕎麦の花江戸のやつらがなに知って
駒引よそばの世並はどの位
一袋そばも添けり駒迎
夕立や塚にもて立そばの膳

一茶

「シートに十枚の切手の他に板画のみが二枚入つてゐる。今月で紹介する作品はシートの中の大きな「手打蕎麦」です。句中の「たんを切る」は「白慢をする」ことこのことよ。

あそ

十月



眞 實

力道山が町にみたころ梅の花
眞實ははにかみがちに竹婦人
森の中紙垂のみがあたりらしく
花札のみな裏側に夏の雨
またも見し瓦礫の中の盆踊

本町三 佐藤喜孝

▽

夏の灯を消しひと筋の風とゐる
金輪際歩かぬ稚児や来迎会
散華拾へぬ人に病葉降りかかる
ハミングめく夫の軒良夜かな
孫たちの帰るが如く夏逝けり

京 橋 篠田純子

▽

立秋や暦と違ふひと日過ぎ
すずかけの木陰にしほしバスを待つ
北国から唐黍届き人恋し
緑蔭の小さき花々安けしや
覗きみて木陰に白き山法師

宝仙寺前
芝宮須磨子

秋の簾

劔地東出つるぎのちひだり
定梶じよう

人を見ず炎暑干し物さへも見ず
遠雷や鳴子こけしが手足欲る
滴るや一問一答するやうに
踊唄時に鄙猥をみな踊る
見てしまふ秋の簾の内灯り

▽

雷走る西武鉄道止めにけり
古民家の二階の座敷遠花火
焼岳の又隠れたり夏の雲
節電の日々の重さや夏果てぬ
福島ふくしまの白桃するり皮剥けり

所
沢
須賀敏子

▽

みんなもにいにいもぬる向う岸
俳諧はいかいにをとこの妬心金魚玉
手花火の小さき火玉の重たさよ
足許あしごにあさがほを彫り入谷駅
吸入きゅういんに睫毛まつげをぬらし合ふ姉妹

浦
和
竹内弘子

鰻

散りしを踏みて仰ぎぬ棕櫚の花
黄金虫草へ戻せば濃緑に
信心のやうに鰻を称へけり
朝虹や津浪の海に魚もどる
風鈴や瓢箪池をみな知らず

田端 田中藤穂

6

棟方志功展

志功展ねぶた祭の色基
裸婦の柵たくましユーモア愛に満つ
旅と祈り不自由も暑さもめげず
旅に明け倭美し秋草木
婦人誌に女人ふくよか曼珠沙華

富田 長崎桂子

▽

住み馴れて蟬穴多くなり
炎天に音の消されしひるひなか
空蟬の眼玉のくぼみ虚ろなる
日の盛り鴉の声の間延びせり
心配ごと次から次へ稲の花

大宮 早崎泰江

▽

節電は顔を消すため盆踊り
コスモスを二鉢買ひてつづく道
皇居秋晴れ目がかすむから身を反す
大奥跡見つめなほして曼珠沙華
納豆は大粒ぎらひ秋気満つ

河田町 堀内一郎

7

日向水

落合森理和

解体のゆらり降ろさる雲の峰
そのままにゐることならず青葡萄
コツコツコツ夏の泊り亀一尾
日向水おんもおんもと出突つ張り
午睡せる天使天才独裁者

▽

大宮山莊慶子

三輛の電車行き交ひ夏の雲
バイク屋の軒先つたふ青葡萄
吹かれ来てたれ訪ふとなく糸とんぼ
空蟬の継りつきをりブロック塀
満腹の動き鈍りし蚊の末路

▽

本町三吉成美代子

夏の雪銀貨キラキラ沈みゆく
海風の少し重たし山紫陽花
弁天を祀る洞窟灯の涼し
外燈が尽きて螢の中にある
遠く来て七夕祭の人となる

▽

鍋屋横丁吉弘恭子

夏落葉踏みてはしやぎてつちふまず
にぎりだこかたくなつてしまふ八月
小指と小指はなすちからや終戦日
みづすまし思ひつきり水鷲づかみ
さざなみを眼裏にため霍乱す

藪 蘭

清 瀬 赤座典子

仙台の澄切つた空敗戦日
新涼の踝たたたく心地よさ
台風報道御当地演歌縁取りぬ
幼気な蟋蟀殆ど色の無く
藪蘭や二月の庭を彩りて

▽

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

八月の草ぼうぼうの庭眺む
日の昇る二階にをれぬ暑さかな
十薬を残しをきたり草を引く
この暑さ長生きしてもどうなるや
八月の寝場所さがして猫の居る

▽

逗 子 鎌倉喜久恵

無聊の日白雨の脚を眺めをり
一日を病みて日暮るる夏の風邪
ジージーと耳蝉の住む果てもなく
年毎に目尻下がるを夏鏡
えいママよ西瓜丸ごと買つちまを

八 月

川崎・小田栄 木村茂登子

黙禱すあの暑き日を忘れめや
螢火の一つは消えず眼裏に
空蝉や浄土の姿さながらに
薄野やすすきのほかは立ち入れず
夏終る惜しむにあらず終るなり

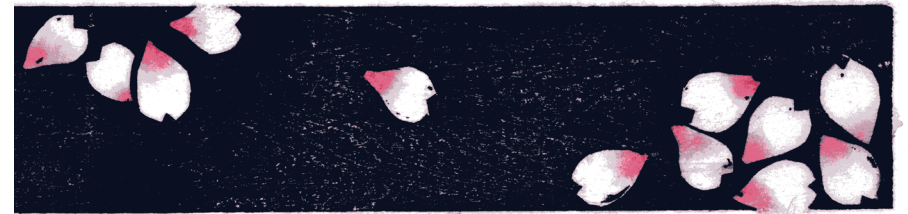
前月作品

風涼し昔のままの大きな駅舎	長崎桂子
待ち人の来たるがごとし青揚羽	早崎泰江
遠廻りして百日紅人を待つ	堀内一郎
鏡台の奥より日の目夏座蒲団	森理和
終戦日同じ時間の朝ご飯	吉弘恭子
ペンキ塗る西日の中の鉄棒に	安部里子
夜鳥の一声太し溽暑かな	鎌倉喜久恵

喜孝抄

一人一句

少年の悪書をひらく花火の夜	佐藤喜孝
白桃の珠玉の滴り丸囀り	木村茂登子
法名はふた文字といふ涼やかさ	篠田純子
風鈴に風が出てきてひとりなり	定梶じょう
梅雨明けるミニスカートの短かさよ	須賀敏子
世に疎きことをたのしむ青瓢	竹内弘子
みんなの鳴きつもののみ昼森と	田中藤穂



少年の悪書をひらく花火の夜

佐藤 喜孝

昔々まだ初心の頃、

悪友や喜んで鳴らすラムネの玉 齊藤 玄

の、殊に「悪友や」と置いたことに瞠目ものでした。
あるいは、

帰省子に村の不良といふが優し 大串 章

の句に、なるほど俳句はこういうふうにするもの
か、と大いに納得、発憤したことでした。そして、

曝書にほふ性に目覚めし頃のほひ 山口 誓子

に至つては、とてもかなわぬ、と思つたことでした。
そして掲句、

少年の悪書をひらく花火の夜

やつぱりすごい、と思つてしまうのです。

性にめざめて、不良とまでは言わないが悪書をひ
らく少年。遠空には大きくひらく花火。その音。
俺が詠むべき句であるよ、と思う人があるいは多
いかも。

土用丑紀文の鰻湯煎して

木村茂登子

固有名詞を上手に使つて、うまい。

友人の言によると、固有名詞の句は、取合せが飛
躍しない方がいいんだそうです。

事実か否かはともかく、

夜桜のぼんぼりの字の粟おこし 後藤 夜半

も飛躍の句ではない。ほんわかとしたへあるいは大
阪人らしい句ですし、そして茂登子さんの句も同
様ほんわかとしている。

紀文のレトルトパウチは誰でも知っています、
句の素材になるとは誰も思つていなかった。そして

か。とは言え、

湯豆腐やいのちの果てのうすあかり 久保田万太郎

には、やつぱり小説家の目を感じてしまう。そして、
純子さんの句から、情緒をしぼりこんだよろしさを
感ずるのは「麦湯」の措辞ある故でしょうか。

金柑の花の白さや余震あり

須賀 敏子

私、金柑の花を実見したことがない。

果実は鉢植のものを見たことがあります、雪国
の当地では余り一般的な木ではないのでしょう。で
すが、密生したその小ぶりの枝葉から想像するに、
きつと小ぶりの花なのでしょう。それもある程度密
生して。

そしてこの句のよろしさは、花の白さを強調した
ところにあるのではない。中七句で休止しておい
て、下五で一気に表現をかえた点にあるのです。そ
れも「地震」ではいささか重たい。「余震」とおいて、
読み手に鑑賞の余裕を与えた。

座五の「湯煎して」が一と押しして句意を深めた。
ただ、「土用丑」がいささかつらい。しかしまあ「土
用丑の日」の、字数の多い語がその内、茂登子さん
のつかつた如くなる可能性、なきにしもあらず。

炎暑の日麻布更級麦湯かな

篠田 純子

前句と同様純子さんも、「麻布更級」のことばを
上手につかつていらつしやる。

喫いたものが麦湯であるのも思いのほかであり面
白い。折角の『更級』ですから「ざる」かと思つた
ら「麦湯」であるという。

炎暑を来て、麦茶でほつとしてゐる処でしょう
か。かの万太郎に、

春麻布永坂布屋太兵衛かな

があります。この句を「文人俳句」である、と断じ
た人がいました。万太郎も漱石も真摯に俳句作り
とりにくんだ方々。文人俳句という、いささか違つた
ジャンルがあるかのように見るのはいかがなもので

金柑の花の白さ、という事実を述べておいて、く
るりと身を躲すごとく「余震あり」と結んだ。句は
こんなふうに作りたいと思う。

世に疎きことをたのしむ青瓢

竹内 弘子

弘子さんといえば、

糸杉も金の麦穂も死の予兆

の句があります。いささか深刻な内容を述べなが
ら、それを感じさせない。言葉の選択が上手なので
す。掲句。もちろん世知の疎さをたのしむのは作者
弘子さんなのですが、垂れはじめた瓢箪@もまた「世
に疎きこと」を愉しんでいるように見える、という
意でしょう。言葉遊びがやっぱり上手なのです。

あをあをと青田のあをの波うてる

早崎 泰江

日本語では、青と緑はほとんど同義につかわれて
いるそうです。交通信号機の青は実際には緑でしょ
うし、青芝しかり、青い山脈もまた。しかしながら、

緑を青に例える例は少ない。で掲句、青田の緑を強
調して、「あをあをと青田の」と。そして、数日前
まで植田であつた苗が伸びて、見ている内に風で波
うつたのです。ちなみに英語で「青々」は [green]
であつて [blue] とはいわないそうです。

入り王にとんで香車や団扇風

吉弘 恭子

敵陣に入った王将に斜め鼻先をとられた香車が、
数間走つたのです。「とんで香車や」がなんともい
い。我々の将棋でしたら、まず入玉する方がほぼ不
利な状況にあるのですが、上手の将棋はそうとは限
らない。ただ、団扇をつかつて風を送っているのは、
まずまず利のある方、と決っている。ことに緑台将
棋はそう。

ペンキ塗る西日の中の鉄棒に

安部 里子

たぶん黒の塗料をつかつて塗っているのではし
ょう。折から西日。

私の住まいする地方は、商船タンカーの乗組員が

多く、その甲板員はペンキ塗りに関してはプロなの
です。従つて彼らは、防錆用のペンキ塗りその他に
大変重宝。数年前、錆の浮いてきた学校の鉄棒、(ま
だ使えるという事でしょう)、防錆ペンキを塗るこ
とになった時も、彼らが作業したことでした。ペン
キ塗りには西日がよく似合うのです。



吟行案内

矢切の渡し

日時 十月二十九日(土) 十一時

集合場所 北総電鉄「矢切」駅

予定コース 矢切駅↓野菊の墓文字碑

↓矢切の渡し↓柴又帝釈天↓京成「柴又」

駅

参加希望予定者は十月十五日までご連絡

ください。

佐藤 喜孝

090-9828-4244

近世俳諧と漢詩文

四七

王岩

影に対して三人の曲

古袴月に舞ふ我をこよひ哉 文 鱗

文鱗は芭蕉の門人鳥居氏。泉州堺の人。前掲の句は其角編『続虚栗』に載せてある。句題の「影に対して三人の曲」が李白の詩「月下独酌」に由来したものと考えられる。句題を加味して、句を味わえば、古袴姿の酔人が月に舞う風狂ぶりは、かの李白の詩と異曲同工の妙があるのではなからうか。

花間一壺酒、
独酌無相親。
举杯邀明月、
对影成三人。

花間 一壺の酒
独酌 相い親しむ無し
杯を挙げて明月を邀え
影に対して三人を成す

月既不解飲、
影徒随我身。
暂伴月将影、
行乐须及春。
我歌月徘徊、
我舞影凌乱。
醒时同交欢、
醉后各分散。
永结无情游、
相期邈云汉。

月は既に飲を解せず
影は徒に我が身に随う
暫く月と影とを伴い
行楽 須く春に及ぶべし
我歌いて月は徘徊し
我舞いて影は凌乱す
醒時 同に飲びを交え
酔後 各おの分散す
永く無情の遊を結び
相い期す 邈たる雲漢

李白の長い漢詩を要約したように、文鱗の句が生まれた。因みに越人にも次の句がある。

醒時同交欢、酔後各分散
月は空へ残る麝の酒臭し

較べて読めば、僕はやはり文鱗の句が好きだ。

曠野より

名月やとしに十二は有ながら
うたか否連歌にあらずにし肴
薺や桓ほのまゝのじだらくさ
青くともとくさは冬の見物哉
沢庵の墓をわかれの秋の暮

あをかき集

田中藤穂選



妻のせしやうにらつきよう漬はする

定樞じよう

出水禍の沖の夕焼なつかしむ

炎暑いま三時仁王が忿怒せり

電燈の紐垂れてゐる端居かな

屈託の身へ扇風機強にする

秋の声天なる父に祈るとき

野にあれば人も一匹秋天下

夏野菜素揚げのことにズツキーニ

木村茂登子

花火師の今日が命の大花火

サングラス決めてタレントらしき男

小さい秋の小さい幸良き目覚

甚平のはしゃぐ子供を肩車

眼にみゆるほど狗尾草に秋の風

残暑なほ持つて出られぬチヨコレート

台風過出張先から便りかな

吉弘 恭子

なめくぢり何所にでも在る活断層

篠田 純子

とこしなへ戦後はつづく蝉の殻

閻魔より脱衣婆こはし蝉の殻

午後二時の片陰地図が胸のあり

小面のアンシンメトリー秋の宵

なめくぢのたかる一樹に雨宿り

風船の暈へ沈む晩夏かな

だしぬけに路地から出でし裸の児

いでかてに空を見上げる山のぼり

でたらめなことばおぼゆる子の汗疹

出外れの屋台の椅子に夏落葉

ひとり居やたたいてうごく扇風機

読終へて余韻極上秋澄めり

赤座 典子

おろし大根盛りて半身の初さんま

とりどりの甘さ楽しむ秋果かな

八朔や子の挙式日の知らせ来る

ほくほくのじゃがいも絶品小諸産

秋の旅三日の準備捗らず

水切りの石を選ばん晩夏光

須賀 敏子

乗鞍岳ターンの多い夏スキー

襪纏ひ頭垂れてる枯向日葵

きれぎれのトランペットや葛の花

三日留守御化け胡瓜となりにけり

一匹の蚊に人相の変わりけり

日向水一日さざなみ繰返す

日傘をも通し灼かるる昼下り

夕顔や安らぐ宵を齎せる

石段ずれて白粉花の活きいき

ホット珈琲残暑を凌ぐ一つとす

アスファルト骨の髓まで残暑染む

いとこ会昭和ひと桁祭唄

鎌倉喜久恵

いつもの子祭髪してよその子めく

藍浴衣少女小意気で小悪魔で

夕立あと濡れてる幹を蟬歩く

まだ少し濡れて吹かれる蛇の皮

夏ばてのカクンと落ちる膝頭

水飯は食おとろへし夏の糧

八月の空青き日に想ふこと
柿青し葉蔭にじつと絶えるごと

早崎 泰江

雨上り汚れ落せし白木樅

鮎食めば夫との月日そこにあり
今朝よりも花数殖えてさるすべり

医者帰り見付けて淋し猫じやらし

長屋門大き日陰に猫一匹

古文書に出自確かむ盃蘭盆会

法師蟬秋への序奏始まりぬ

山峡に時折赤く遠火花

森 理和

春陰や永井荷風の靴の泥

竹内 弘子

朝涼や男を曳きしトイプードル

細長い闇をおもへり秋の蛇

夕顔や瞳の奥にある悩み

眼蔭して鼯のよぎる春のくれ

七月の出かけじまひの叔母の家

安部 里子

花しきみ雨水たまる飯茶碗

七月の旅に出たいと仕度する

夏原に十字なす路ひとり路

佐藤 喜孝

いまだ見ぬこの家の人大芙蓉

その中の青松虫がきらひな木

こころ病む人に初風とどかさる

右の空左の空に秋はじめ

炎天をヘルパーの押す車椅子

芝宮須磨子

佳句後言



なめくぢのたかる一樹に雨宿り

純子

急に雨が降ってきて、近くの樹の下に雨宿りしたのでしよう。気がつくとき、その樹になめくぢが一杯たかっている。あらまあ、なめくぢと一緒に雨宿りしてしまった。一筆書きのような句ですが、情景も心の動きもありありと解つてとても面白い句だと思いました。

電燈の紐垂れてゐる端居かな

じょう

端居しているときというのは、日常生活の煩雑さからふと離れた、エアポケットのような、不思議な時間だ。それと電燈の紐垂れてゐると組み合わせるのは手足れの作品。垂れている電燈の紐にもちゃんと役割はあるけれど、ただ垂れているときは、何となく暇そうな無意味のような……。

風船の畳へ沈む晩夏かな

純子

空気が少し抜けたゴム風船が、だんだん降りてきて、遂に畳の上で止まった。暑さの厳しかった夏もようやく終わりに近づいた晩夏の、何となくくたびれたような気分がよく出ている佳句。

花火師の今日が命の大火花

茂登子

私はいつも不思議に思うのですが、東京なら隅田川、その他あちこちで行われる花火大会は、別に観覧料もとらないのに、どうやって採算がとれるのでしょうかね。花火師は相当の年月をかけて念入りに火花の玉を作り上げ、打上げる一瞬であとかたもなく

なってしまう。不思議な職業です。今年は東北の大震災による死者への慰霊、鎮魂ということで花火大会が行われ、例年とまた違う、しみじみとした思いで花火を見上げました。年毎に新しい工夫が加えられ、一等、二等などもきめられ、賞金・賞品などもあり、花火師も、打ち上げてみて初めて自分の作ったものの成果を知るのでしようから、さぞ、息をのむ思いであろうと思います。隅田川の花火は、私の家まで、音はガンガン響きます。大花火の力強さ、美しさ、哀愁、大好きです。私が長々と書いたようなことを、この句はただの十七音でしつかりとまとめていて、見事です。

でたらめな言葉おぼゆる子の汗疹 恭子

生まれた子供が言葉を覚えるのは、二才から三才

になる間位が一番めざましい。それは大人からみると、でたらめなことばに思えても、本人にしてみれば、大真面目、一生懸命なのです。いっぱい汗をかいて、おでこや首などに汗疹を作りながら、頭脳も身体も時々刻々と成長進歩しているのです。うちの孫も、お姉ちゃんをアユチャンと言えなくてアユタツ、アユタツと追いまわすので、大笑いした覚えがあります。

細長い闇を思へり秋の蛇 弘子

するすると地を這う蛇のまわりを包んでいる闇は確かに細長いでしょう。そう思うと、ちよつと薄気味悪いけれど、意表をついた句です。

あを柳集

兼題 底 佐藤喜孝 選

秋風を跨ぐ靴底登山道

秋風を跨ぐ靴底といふ視点が特異であります。登山道といふ道はいつも地面があるとは限らない。時には谷底を跨ぐやうなところもあります。そんな場所を私は想像しました。地震の靴底を感じてゐるのか、または人の登山靴の底を見る位置にゐるのか。どちらにしても険路のやうです。

底力出し復興を秋刀魚漁

チリ鉞山熱き地底から生還

題詠であつてもこのやうな思ひの句が出来るのですね。作者も被災者と共に底力を出してゐることでしょう。「あを柳」集は今月で終りにしますが、辞書の中を這ひずり回る楽しみを私はこれからも続けていくことでしょう。語彙を広げる、俳句表現の道具を得ることに興が尽きません。

手底は土器のやういちゃうの實

ルビを振つてみました。たなそこは「たなごころ」におなじ、と辞書に。「掌」と「手底」とどちらがこの句に相応しいかを考へました。見馴れ、聞き慣れてゐる「たなごころ」または「てのひら」が似合つてゐませんか。かはらけのやうな手とは遊び人の手ではなささうです。その掌に乗つた銀杏。単純ですが内容の濃い作品です。銀杏が縄文時代までさかのぼることが出来るか調べましたが、結構新しく平安か鎌倉時代ださうです。

題詠「底」（順不同）

日々炎暑地底に埋める燃料棒

田中 藤穂

海底の漁網と漁船夏の月

秋風を跨ぐ靴底登山道

水底の苔むす石と苔の花

長崎 桂子

爽やかや青年心底見せず笑む

鯨底引網に力瘤

底力出し復興を秋刀魚漁

底なしの沼の民話や長き夜

千り鉞山熱き地底から生還

木村茂登子

土用波眼のない魚は海の底

眼底に残つてしまふ雪の富士

吉弘 恭子

函底にひそますさくら貝ふたつ

低意から笑みのこぼるる初節句

底りからあらはる高坏秋の雲

澗低に枯葉を蹴つて深呼吸

湖底からひびく声あり散り紅葉

手底は土器のやういちやうの實

底紅や歇私的里をばうつくしく

佐藤 喜孝

海底にさきまはりして落花まつ

底抜けの宇宙の底の大きな口

原發の底の抜けたる暑さかな

あめつちの底の秋風蟻あるく

芳紀なりアイスクリンの底きれい

雪の底朝晝暮と火を鑽らむ

雪の底生きるあかしの放尿す

あとがき

「あをかき」・「あを柳」は今月で一休止。歴代の選者様ありがとうございました。私も「あを柳」で選のまねごとをさせて頂いたが、大変疲れる仕事であった。田中藤穂さんも初めての経験でご苦労されたやうだ。投句する方が百倍気楽であることが今更ながら分つた。瀧春一・高島茂両先生にあらためてお礼をもうしたい。大結社の選者は創作者とは違ふ才がなければ務まらないと思つた。

慶祝。八田木枯先生が「第3回小野市詩歌文学賞・俳句部門」を『鏡騷』で受賞なさいました。一回目は広瀬直人、二回目は金子兜太、そして三回目は八田木枯、大きな賞です。おめでとうございます。

『俳句四季』九月号に吉弘恭子さんが『尾氐骨』八句を発表。同じ号に大山夏子先生の『集』が紹介されてゐた。これも奇縁と話合つたことです。

『俳句界』九月号の「全国の秀句コレクシヨン」に

店番の分厚き漫画雀の子

赤座典子

が採り上げられてゐた。「あをかき集」六月の巻頭句。藤穂さんが「何だか救われるように楽しいのんびりした句です。雀の子がびつたり合っていて、一枚の絵が画けそうです。」と鑑賞された。

私は溜つてゆく句集を横目にせつせと佐伯泰英を読んで過したこの夏でした。

ご厚志多謝

武井明子 様

大山夏子 様

二〇一一年十月号

発行日 十月十日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。